

中 大 野 一 心

NO.6

令和5年4月26日(水) 文責：校長 諸熊 修一

「あすなろの日」について

新年度が始まって3週間が過ぎようとしています。どの学年も気持ちを新たに、今年一年頑張っていこうという雰囲気になり溢れています。

このような時期、今から25年程前に、入学したばかりの一人の生徒が自ら命を絶とうとし、回復の願いもむなしく、その2年後の4月24日に亡くなりました。原因は、その生徒に対する複数の生徒からの心無いことばの数々でした。ご家族はもちろんのこと、関わった全ての方が深く傷つき悲しみました。

大野中学校では、本校で発生した痛ましい事案を二度と繰り返さないためにも、毎年4月24日を「あすなろの日」に設定し、道徳の時間を使って、新入生は「あすなろの日」の由来について知り、在校生は再確認することによって、日頃の自分の学校生活における言動を振り返ります。このような取組をとおして、今後のよりよい学校生活や交友関係につながっていくきっかけになればと思います。

もちろんこのような取組は一過性で終わるのではなく、6月に実施する「いのちを見つめる強調月間」での取組や年間を通して実施する人権・同和教育における取組等を通じながら、子どもたちの心を耕していきたいと思えます。そして、「自分を大切にするとともに他の人の大切さを認める人」に成長して行ってほしいと強く願います。



「願い」

坂 憲章

親を失った子を「孤児」という
夫を失った妻を「未亡人」という
妻を失った夫を「やもめ」という
では 子を失った親を何と呼ぶのか 私は知らない
少年少女たちよ 君はその言葉を知っているか
知っているならどうか私に教えておくれ

私は思う

それは子に先立たれた親の悲しみは

言葉に言い尽くせない 言葉にならないのだ

君が生きてあれば そのことのみで親は足るのだ うれしいのだ

そして真実ありがたいのだ

少年少女たちよ 生きられよ 死んではいけない

ましてや 人のいのちを 決してあやめてはいけない

太陽の光がこんなにこぼれて

夏の大いなる青空がこんなに輝いているのに

ほんの少しだけの曇りや 嵐や

つかの間の冬のいのちを避けてはならない

君たちは 光と大いなる風景を なくしてはいけない

乗り越えることができる人にだけ 試練を与えてくださるのだ

それに答え感謝しよう こたえよう

君のいのちの日々を 輝かせてくれることを願って

